

第五章 準動詞(2)

不定詞

レクチャー1

不定詞についての基礎知識。

(1)不定詞とは。

そもそも「不定詞」という言葉の由来は、『主語の人称(I, he, we...)とか数(単数・複数)、あるいは時制(現在・過去)などの影響を受けない、つまりそれらの”定め”を”不受”(受けない)詞(ことば)』という意味です。

不定詞には「to不定詞」と「原形不定詞」があります。「to不定詞」とは、「to+do[原形]～」のことで、「原形不定詞」とは「動詞の原形」とも呼ばれますね。to不定詞は、S・O・Cになったりその他にも様々な働きを文中でします（これについては後述）が、原形不定詞は、以下の3つがその主な用法となります。

①SVOOCのCになる 愈詳しくは「レクチャー2」(2)②を参照せよ。

(ex) I helped my mother wash the dishes.

私は母の皿洗いを手伝った

②助動詞の直後に置かれる

(ex) I can finish the job.

私はその仕事を仕上げることができる

③イディオム・慣用的な用法

1.do nothing but+V[原形]～「～ばかりする」 ☞ butは「～以外(に・の)」という意味。

(ex) The child did nothing but weep all day.


その子供は一日中泣いてばかりいた

2.help (to) V[原形]～「～するのを手伝う、～するのに一役買う」

(ex) I helped (to) paint the house.

家のペンキ塗りを手伝った

3.All S have to do is (to) V[原形]～「Sは～しさえすればいい」

=S have only to V[原形]～  to が省略される場合のルールについては「レクチャー10」②を参照せよ。

(ex) All you have to do is (to) study hard.

一生懸命勉強しさえすればいい

=You have only to study hard.

4.All S can do is (to) V[原形]～「Sができるのは～することだけだ」

「Sは～する(より)他ない」

(ex) All we could do was (to) wait for him.

我々は彼を待つ他なかった

5.had better V[原形]～「～した方がよい」

(ex) You had better take an umbrella with you.

傘を持っていった方がいい

(2)不定詞の3用法。

しかしながら、不定詞と一般的に言う場合、to不定詞のことを指すことが多いと言えます。そしてそのto不定詞には3つの用法があります。それが「名詞用法」「形容詞用法」「副詞用法」の3つです。

ではさっそくそれらの用法を、以下のレクチャーで具体的に見ていくことにしましょう。

不定詞の名詞用法。

(1)不定詞の名詞用法とは。

不定詞の名詞用法とは、簡単に言えば、不定詞が英文中で名詞と同じ働きをする、つまり「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」のいずれかになる場合を指して言います。

⚠動名詞とは異なり、不定詞は「前置詞の目的語」にはなれない。つまり「前置詞+to do[原形]～」という形はない。

その場合、その不定詞は「～すること」と訳します。具体例をあげてみましょう。

(ex) To know is important. 知ることは大切だ
S

I plan to study abroad. 私は留学することを計画している
O

My job is to sell these products.
C

私の仕事はこれらの製品を売ることです

It is important <u>to study English every day</u> .	
仮・主	真・主
<u>英語を毎日勉強することは大切だ</u>	仮・主…仮主語 真・主…真主語

⚠上例のように、不定詞がいわゆる仮主語構文の「真主語」になることもある。

I find it most pleasant <u>to swim in the ocean</u> .			
仮・目	C	真・目	
<u>海で泳ぐことはとても楽しい</u>		仮・目…仮目的語 真・目…真目的語	

⚠上例のように、不定詞がいわゆる仮目的語構文の「真目的語」になることもある。この英文は元々「find O C:OはCだと思う、分かる」という構文が下敷きになっている。

それから不定詞が「SVO C」の「C」になることがあります。

① 「S+V+O+ to do[原形]~」型。
C

「SVO to do[原形]~」型をとる動詞は、実際には相当数ありますが、そのうち文法・作文問題などで頻出のものを15個あげてみました。これらは超頻出のベスト15です。ですからぜひ、全て丸暗記してしまってください。

1. want O(人・物) to do[原形]~ 「Oに~して欲しい」
2. would like O(人) to do[原形]~ 「Oに~していただきたい」
3. expect O(人・物) to do[原形]~ 「Oが~するのを期待する、予期する」
4. enable O(人) to do[原形]~ 「Oが~するのを可能にする」
5. force O(人) to do[原形]~ 「Oに無理やり~させる」
=compel[oblige] O to do[原形]~
6. allow O(人) to do[原形]~ 「Oが~するのを許可する」
=permit O to do[原形]~
7. tell O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう言う」
8. order O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう命令する」
9. persuade O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう説得する」
10. advise O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう忠告する」
11. ask O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう求める、頼む」
12. cause O(人・物) to do[原形]~ 「Oに~させる」
13. get O(人・物) to do[原形]~ 「Oに~させる」
14. encourage[urge] O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう促す」
15. warn O(人) to do[原形]~ 「Oに~するよう警告する」

② 「S+V+O+do[原形]~」型。
C

ついでなので、原形不定詞がSVOCCのCになるパターンもあげておきましょう。この「SVO do[原形]~」型の動詞については、全部で下の5種類しかありません（それだけに大学入試などでは頻出！）。ですからこれらも全部覚えてしまいましょう。

1. make+O+do[原形]~ 「Oに~させる」 [強制]
=force+O+to do[原形]~

(ex) I will make Kim go there regardless of her will.

私は、キムの意志に関係なく彼女をそこに行かせるつもりだ

=I will force Kim to go there regardless of her will.

2. let+O+do[原形]～ 「Oに～させる」 [許可]

=allow[permit]+O+to do[原形]～

(ex) My parents let me travel alone as a birthday present.

両親は誕生日のプレゼントとして私に一人旅をさせてくれた

=My parents allowed me to travel alone as a birthday present.

3. have+O+do[原形]～ 「Oに～させる[してもらう]」

≒get+O+to do[原形]～

(ex) You should have a mechanic look at this motor bike.

君はこのバイクを修理工に見てもらわなければならない

≒You should get a mechanic to look at this motor bike.

4. help+O+do[原形]～ 「Oが～するのを手伝う」

④ help については、Cに「to不定詞」を用いてもいい。

(ex) This will help you (to) solve the problem.

これは君が問題を解決するのに役立つだろう

5. 知覚動詞+O+do[原形]～ 「Oが～するのを見る[聞く、感じるなど]」

(ex) I saw him enter the room.

私は彼が部屋に入るのを見た

そして、この種(SVO (to) do[原形]～型)の動詞は、基本的に「Sは、Oが[を] Cするよう仕向ける[方向に向ける]」という意味になるのが特徴です。

(ex) He ordered his girlfriend to go there.

O C

上例も、order O to do[原形]～の語法をたとえ知らなくても、「彼は自分のガールフレンドがそこに行く方向に仕向けた」で大枠の意味はとれてしまいますね。

④このルールの例外には expect、知覚動詞、それから forbid O to do[原形]～(Oが～するのを禁じる)などがある。

(2) 「疑問詞+to do[原形]～」。

「疑問詞+to do[原形]～」も、名詞用法(の不定詞)として文中で「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」のいずれかになります。

(ex) I don't know what to do next. 次に何をすべきかわからない
S V O

上の英文では、what to do next が know の目的語になっています。

そして「疑問詞+to do[原形]～」は、訳す場合には「疑問詞+(す)べきか」と訳すのが特徴です。

(ex) I asked him where to go. 私は彼に、どこに行くべきか尋ねた
S V O₁ O₂

他にも具体例をあげてみましょう

what to do	「何をすべきか」	how to shift gears	「どうやってギアを変えるか→ギアの変え方」
where to go	「どこへ行くべきか」	how to live	「どう生きるか→生き方」
when to start	「いつ出発すべきか」	how much to eat	「どれくらい(たくさん)食べるべきか→食べる量」
which to choose	「どちらを選ぶべきか」		

「疑問詞+to do[原形]～」に関するその他の注意事項を、以下にあげておきます。

- ① how to do[原形]～だけは「どのように～(す)べきか」「～の仕方[やり方、方法]」と、2種類の訳し方ができる。
また how の場合、「how+副詞 to do[原形]～」となることがあるが、その場合は、「どれくらい(+副詞)+～(す)べきか」と訳すといい。

(ex) Tell me how long to wait.
どれくらい(長く)待つべきか教えてください

- ② what と whichに関しては、「what+名詞 to do[原形]」「which+名詞 to do[原形]～」と、直後に「名詞」を伴う形もある。この what や which の後ろの名詞は、what, which の具体的な中身を(同格的に)説明しており、「what[which]=名詞」の関係になっている。

(ex) I didn't know which way to choose.
どちらの道(やり方)を選ぶべきかわからなかった

上の例文は way がなくても意味は通じるが、そうすると「どちらを選ぶべきか」という漠然とした内容になってしまう。way をつけることによって which

の中身が「道(方法)」だったとハッキリする。つまり which=way の関係になっているのだ。

③ 「疑問詞+to do[原形]～」は「疑問詞+S+should+do[原形]～」で書き換えられる。

(ex) I didn't know what to do next. 次に何をすべきかわからなかった
=what I should do next

《もう一步深く!! 「what と which の後の名詞について》

what+名詞 to do[原形]～、 which+名詞 to do[原形]～ といった形がありうること、更にその「名詞」の果たす役割について学びましたが、このように what, which 直後に挿入された名詞は、

① what, which の具体的な中身を(同格的に)説明し、「what[which]=名詞」の関係になる

② 省略しても文法[構造]の問題はないが、文の意味を成さなくなる。

というのは、実は中学校からおなじみなのです。以下の英文を見てください。

(ex) What **music** do you like best ? ☞ 「What=music」の関係。music は
どんな音楽が一番好きですか What の中身を説明している。

Which **picture** do you prefer ? ☞ 「Which=picture」の関係。picture
どちらの絵の方が好きですか は Which の中身を説明している。

またこのルールは、関係代名詞の what、それから whatever や whichever にも当てはまります。

(ex) I will give you what **money** I have.
私の持っているお金を君にあげよう

Whatever **problems** you have, I'll always support you.
どんな問題があっても、いつでも私はあなたを支援します

You can choose whichever **box** you like.
どちらでも好きな箱を選んでいいですよ

③ 「同格関係」・・・後ろの不定詞が、前の名詞の具体的内容を説明・補足する。つまり前の名詞と不定詞がいわゆる「同格」になる。

(ex) I followed[従った] his decision to go there.

☞ to go there は、直前の his decision(の中身)を説明している。意味は「ボクはそこに行くという彼の決定に従った」。

「同格関係」になる不定詞を後ろにとるような名詞は、その語が動詞化、形容詞化した際にも、後ろに不定詞をとるものです。

(ex) decision to do[原形]～ ⇒ decide to do[原形]～
ability to do[原形]～ ⇒ be able to do[原形]～

(3)形容詞用法の不定詞で最も狙われやすいタイプの問題。

Q : 以下の空所に一語補え。

- ① I need a pen to write ().
② I need some paper to write ().

これは、不定詞の直前の名詞が後ろの不定詞句の目的語になっている、つまり目的格関係です。この手の問題は、直前の名詞を不定詞の後ろに移動させて見た場合、不定詞句とその名詞が上手くそれとつながるのか？(つながればそれで良いが)つながらなるとすれば、両者のつなぎとなる語として何が最適か？そのように考えるといいのです。

そこで①について。a pen を不定詞の後ろに移動させた場合、write a pen とは言えません(writeの目的語になれるのは、基本的に「本」「文字」「手紙」等)。ここでは「to write with a pen:ペンをもって書く」と、「～で(もって)」という意味になる、手段・道具を表す with がワンクッションとして最適ですね。

②の場合、some paper を不定詞の後ろに移動させた場合、write some paper とは、①同様言えません。ここでは「to write on paper:紙(の上)に書く」と、「～の上に」という意味になる、場所を表す on がワンクッションとして最適です。

こうして①の空欄には with が、②の空欄には on がふさわしいとわかるわけです。

解答:①with ②on

不定詞の副詞用法。

(1)不定詞の副詞用法とは。

不定詞の副詞用法とは、**名詞以外を修飾する**不定詞を指して言います。この用法の不定詞も、文の主要素（S・O・C）にはなりません。

文中の不定詞が副詞用法かどうかを見極める手っとり早い方法は、その不定詞が、

- ①「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」のいずれにもなっていない
- ②(直)前に名詞があって、その名詞を修飾しているわけでもない

この2つの条件に当てはまっている場合、副詞用法の不定詞だと考えるのが一番効率的と言えるでしょう。

(2)副詞用法の不定詞の詳しい見極め方法。

副詞用法の不定詞の表す意味を参考書などで見ると「目的」「結果」「条件」「感情の原因」「判断の原因[根拠]」…と、あまりにたくさんあって、どうやって覚え、また見極めたらいいのか、本当にやっかいですね。

そこで、その見極めを簡単にしてしまう裏技を紹介しましょう。

- ①副詞用法の不定詞は、大半(約70%)が「目的(「～するために」)」又は「結果(「そして～」など)」である。だからまずそれで訳してみて、おかしければそれ以外の可能性を考えてみるという

また、「目的」であることをはっきりさせるために

- 1.in order to do[原形]～
- 2.so as to do[原形]～

という形が長文などでは使われることもあります。

簡単な例をあげてみましょう。

(ex) We come to school to study and to acquire knowledge.

僕達は勉強して知識を身につけるために学校に来ている

She had to speak loudly in order to make herself heard.

自分の言うことを聞いてもらうために、彼女は大声で話さなければならなかった

He hurried out so as to be in time for class.

彼は授業に間に合うように急いで家を出た

②不定詞が「結果」を表す場合、その不定詞部分を「接続詞 S+V～」で書き換えられる

逆に言うなら、その不定詞部分を「接続詞 S+V～」で書き換えられるなら、その不定詞は「結果」を表していると見たらいいでしょう。結果の不定詞を用いた英文と、その不定詞を「接続詞 S+V～」で書き換えた例をいくつかあげてみましょう。

(ex) He grew up to be a doctor.

=and he became a doctor

彼は成長して(そして)医者になった

The man left the town never to return.

=and he never returned

その男はその町を離れ、(そして)二度と戻ってこなかった

Her grandmother lived to be eighty.

=till she was eighty

彼女の祖母は80才まで生きた

ただし、「only to do[願形]～」は必ず、「but S+V～」で書き換える点を頭に入れておきましょう。

(ex) I hurried only to miss the train.

僕は急いだが、しかし列車に乗り遅れた

上の英文も、下線部分は「but S+V～」、つまり but I missed the train と書き換えることができますね。

③不定詞が「感情の原因」を表わす場合の見極め方

不定詞が「感情の原因」を表わす場合の見極め方は以下の通りです。

1.不定詞の前に感情を表わす語(具体的な品詞としては「名詞」「形容詞」「分詞」)がある。

2.その場合、不定詞は「～して」「～できて」と訳す。

簡単な例をあげてみましょう。

(ex) I'm glad to see you.

上の英文の不定詞(to see you)の直前には glad(うれしい)という感情を表す語(形容詞)がありますね。これが見極めのポイントとなって、to see you は「あなたにお会いできて[して]」と訳すわけです(全体は「あなたにお会いできてうれしいです」)。

④不定詞が「判断の原因[根拠]」を表わす場合の見極め方

不定詞が「判断の原因[根拠]」を表わす場合の見極め方は以下の通りです。

- 1.不定詞の前に必ず人の性質・性格を表わす語(具体的な品詞としては「動詞」「形容詞」「分詞」等)又は good型・bad型の形容詞[分詞]がある。
- 2.その場合、不定詞は「～なんて」「～とは」と訳す。

簡単な例をあげてみましょう。

(ex) He was careless to say such a thing to her.

上の英文の不定詞(to say～)の直前には careless(不注意な)という人の性格を表す語(形容詞)がありますね。これが見極めのポイントとなって、to say～her を「そんなことを彼女に言うなんて[とは]」と訳すわけです(全体は「そんなことを彼女に言うなんて彼は不注意だったね」)。

⑤不定詞が「条件」を表す場合の見極め方

不定詞が「条件」を表わす場合の見極め方は以下の通りです。

- 1.主節に推量の助動詞(will[would], may[might], can[could]等)が多い。
④「主節」は、接続詞などの付いていない、いわゆる「(裸の)S+V」のこと。
- 2.その場合、不定詞は「もし～なら」と訳す。

簡単な例をあげてみましょう。

(ex) To say it carelessly, you may be misunderstood.

上の英文の文頭の不定詞(To say～)を、この部分だけ見て意味を判断することは難しいでしょう。そこで主節に着目すると、may という推量の助動詞が見え

ます。これが見極めのポイントとなって、To say it carelessly, を「もしそんなことを不注意にも言うなら」と訳すわけです(全体は「もしそんなことを不注意にも言うなら、君は誤解されるかもしれないよ」)。

(3) tough 構文(直前の形容詞を限定する不定詞)。

tough 構文とは、

S+be動詞+形容詞+to do[原形]~

という構造で、不定詞(to do[原形]~)の目的語にあたる名詞が、文の主語と同じであるために、それ(不定詞の目的語)が省かれてしまった構文を指して言います。これも副詞用法の不定詞の一種なのですが、「tough 構文」として頭に入れた方が整理しやすいでしょう。具体例を見てみましょう。

(ex) This problem is easy to solve.

この問題は解くのが簡単だ

上の英文中の (to) solve は元々他動詞で、目的語を必要とします。本来なら

This problem is easy to solve this problem.

としたいところなのですが、文の主語も this problem、つまり文の主語と不定詞 (to solve)の目的語が同じであるために、不定詞の目的語だった文末の this problem は省かれてしまっているのです。

この tough構文は It is+形容詞+to do[原形]~. の仮主語構文で書き換えることができます。上の英文も以下のように書き換えられます。

→ It is easy to solve this problem.

この tough 構文に用いられる形容詞には以下のようなものがあります。

1. 「簡単だ・難しい」 … easy・difficult[hard, tough]
2. 「重い・軽い」 … heavy・light
3. 「安全だ・危険だ」 … safe・dangerous
4. 「楽しい・楽しくない」 … pleasant[fun]・unpleasant
5. 「可能だ・不可能だ」 … possible・impossible

④・tough 構文と呼ばれる理由は、たまたま tough からこの構文の研究が始まったから。

・possible に関しては、否定文・疑問文・条件文においてのみ tough 構文が可能。

(ex) The book is hardly possible to read in a day.

この本を一日で読むのはほとんど不可能だ

Is this book possible to read in a day?

この本を一日で読むのは可能ですか

この tough 構文は、副詞用法の不定詞の中で、「結果の不定詞」と共に文法問題では超頻出です。以下の例題でその解き方の手順を整理しておきましょう。

例題 This river is dangerous to () in July. (センター試験)

① being swum ② swim in ③ swim it ④ swim

では解説しましょう。

- (1) dangerous には「A is dangerous to B: AはBにとって危険だ」という語法があるが、その場合の to は前置詞で、直後には名詞が来るはず。本問の to は不定詞、つまりこの英文は tough 構文だろうと判断する。
- (2) tough 構文、つまり、to は不定詞と判断できれば、(toの直後は「原形」になるはずで)まず①の可能性はない。
- (3) tough 構文においては「文の主語＝不定詞の目的語」であり、その「不定詞の目的語」は省かれる。ということは②～④の選択肢の直後に文の主語を補って、上手く「不定詞+目的語」の関係になりうるものが正解となるはず。
- (4) そこでそれぞれの選択肢の直後に this river を補ってみる。

② (to) swim in this river ☞ O.K.

③ (to) swim it this river ☞ it this river は明らかにおかしい

④ (to) swim this river ☞ swim は自動詞なので直接後ろに目的語を取ることはない

(5)訳は「この川は7月に泳ぐのは危険だ」。

というわけで、正解は②になります。

もう1つだけ例題をあげておきましょう。

例題 Jack is difficult (). So you won't be able to get along with him.

- ① to please him ② pleasing him ③ to be pleased ④ to please

解説は以下の通りです。

- (1) 空欄部の直前の difficult と文全体の構造に着目して、空欄部には不定詞が入るのでは、つまり tough 構文なのではと見抜く。
- (2) tough 構文とわかれば、②の可能性はこの時点で消える。
- (3) difficult の後ろの不定詞が、自身の目的語が欠けた(そして「その不定詞の目的語=文の主語(Jack)」となる)選択肢を選べばいい。つまりそれぞれの選択肢の末尾に文の主語(Jack)を補って、上手く「不定詞+目的語」の関係になりうるものが正解ということになる。
- (4) ちなみに please は他動詞として「please A(人):Aを喜ばせる」という意味がある。そうすると (to) please Jack となる④が正解ということになる。
- (5) 訳は「ジャックは喜ばせるのが難しい人物(つまり難しい人)だ。だから君は彼とは仲良くやっていけないだろう」。
- 罫「get along with A(人):Aと仲良くやっていく」というイディオムは頻出。

(4) 副詞用法の不定詞を用いた慣用表現。

副詞用法の不定詞を用いた慣用表現として、受験で頻出なのは以下の2つです。

- ① ~ enough to do[原形]… 1. 「とても～なので…」
 =so ~ as to do[原形]… 2. 「…するほど(十分)～」
 =so ~ that S+V…

この構文は、上のように、文脈によって2種類の訳し方の可能性があります。注意点は以下の2点です。

1. 「～」の部分には「形容詞」や「副詞」が入る。
 2. 「enough+(形・副)+to do[原形]～」という形はない。☞つまりenoughは必ず「形容詞」「副詞」

以下に例文をあげておきましょう。 の後ろに置かれる!

- (ex) He was kind enough to show me the way.
 =He was so kind as to show me the way.
 =He was so kind that he showed me the way.
 彼は親切だったので、私に道を教えてくれた
 You are old enough to know this.

=You are so old as to know this.

君はこのことを知っていてもよい年だ

② too ~ to do[原形]… 「あまりに～なので…できない」

=so ~ that S+cannot[don't]+do[原形]…

この構文も文脈によっては「…するにはあまりに～すぎる」と後ろから訳し上げた方がいいこともあります。また①と同じように「～」の部分には「形容詞」「副詞」が入ります。

(ex) I was too tired to finish the work yesterday.

=I was so tired that I couldn't finish the work yesterday.

私はあまりに疲れていたのが昨日その仕事を終えることができなかった

The rock was too heavy for me to lift.

=The rock was so heavy that I couldn't lift it.

その岩はあまりに重かったので私は持ち上げることができなかった

④上の英文の場合、不定詞の前に for me という意味上の主語がついたパターン。更に、文の主語(the rock)と不定詞の目的語が同じ[-一致する]ので、不定詞の目的語(it=the rock)が省かれてしまっている。

なお、このいわゆる too ~ to 構文と似て非なるものに、very と同じ意味の only too に副詞用法の不定詞がくっついたものがあり、引っかけ問題としてよく狙われます。例をあげてみましょう。

(ex) He was only too glad to come with you.

彼はあなたとご一緒できて、とても喜んでいた

上の英文は、only too glad(とてもうれしい)の後の to come～ は「感情の原因」を表す単なる副詞用法の不定詞(「～して、できて」と訳すんだった)に過ぎず、これを too ~ to 構文と勘違いしてはいけません。

(5)独立不定詞。

これらについては、(不定詞を用いた)一種のイディオムとして覚えてしまいましょう。

① to say the least (of it) 「控えめに言っても」

(ex) To say the least, he is an excellent scholar.

控えめに言っても彼は優れた学者だ

② to begin[start] with 「まず第一に」

(ex) To begin with, he is inexperienced, secondly, he is unreliable.
まず第一に彼は経験が足りないし、第二に信用できない

③ needless to say, S+V～ 「言うまでもなく(～だ)」 「もちろん(～だ)」
=it goes without saying that S+V～

(ex) Needless to say, we will support your plan.
もちろんあなたの計画を支持します

④ to tell[speak] (you) the truth 「実を言うと」

(ex) To tell the truth, I haven't read this book yet.
実を言うと、まだこの本は読んでいません

⑤ to be frank with you 「率直に言って」

(ex) To be frank with you, I don't like his new novel.
率直に言って、彼の新しい小説は好きではありません

⑥ strange to say 「奇妙なことに」

(ex) Strange to say, they didn't accept our offer.
奇妙なことに彼らは我々の申し出を受けなかった

⑦ not to mention A 「Aは言うまでもなく」

(ex) He can speak French, not to mention English.
彼は英語は言うまでもなくフランス語も話せる

⑧ not to say A 「Aとは言わないまでも」

(ex) She made a cool, not to say hostile, response.
彼女は敵意を持ったと言わないまでも、冷やかな返答をした

⑨ to be brief 「手短に言えば、要するに」

(ex) To be brief, I hate him.

手短に言えば、彼のことは大嫌いだ

⑩ to sum up 「要約すれば」

(ex) To sum up, they couldn't forgive a man who betrayed his friends.

要約すれば、彼らは友を裏切る人間を許せなかったのだ

⑪ to say nothing of A 「Aは言うまでもなく」

=not to speak of A

=not to mention A

(ex) She speaks French and German, to say nothing of English.

彼女は英語は言うまでもなく、フランス語とドイツ語も話せる

⑫ to make a long story short 「かいつまんで言うと、早い話が」

(ex) To make a long story short, she doesn't want to see him.

手短に言えば[早い話が]、彼女は彼に会いたくないのだ

⑬ to do A justice 「Aを公平に評すれば」

(ex) To do him justice, he is a good-natured man.

公平に評すれば、彼はお人好しだ

⑭ to make matters worse 「更に悪いことに」

(ex) To make matters worse, it started to snow.

さらに困ったことには、雪が降ってて来た

⑮ to add to A 「Aに加えて」

(ex) To add to his misfortunes, he lost his girlfriend.

さらに不運なことに、彼はガールフレンドにふられてしまった

⑩ to conclude 「結論として言えば」

(ex) To conclude, I am against[for] this proposal.
結論として言えば、この提案に反対[賛成]です

⑪ to put it in another way 「別の言葉で言えば」

(ex) To put it in another way, he is shy with strangers.
別の言い方をすれば、彼は人見知りなのです

⑫ to be accurate[exact] 「正確に言うと」

(ex) To be accurate, this product has some defects.
正確に言えば、この製品はいくつかの欠陥がある

レクチャー5

不定詞の意味上の主語。

英文中で使われている不定詞の(直)前に for A という語句が付いていることがあります。その場合(つまり「for A to do[願]～」の)、「A」と「to do[願]～」の間には「主語と述語の関係(つまり「Aは～する・される・なる・である」という意味関係)」が成立しています。

(ex) It is very important for you to study hard.
(主) (述)

あなたは一生懸命勉強することが大切です

確かに上の英文でも you と to study の間には「あなたが勉強する」という意味関係が成立していますね。

この「for A」の「A」にあたる名詞のことを(不定詞の)意味上の主語と呼びます。

この意味上の主語というのは、どんな場合にも付くというわけではありません。つまり付く場合と付かない場合があります。

(1)意味上の主語を明示する必要がない場合。

①文の主語と(不定詞の)意味上の主語が同じである場合。

(ex) I worked hard in order to save money.

私は金を貯めるために一生懸命働いた

上の英文の場合「貯める(to save)」のは「私(I)」であり、文の主語も「私(I)」です。このように「文の主語=不定詞の意味上の主語」の場合は、不定詞の意味上の主語を英文中に明示する[付ける]必要はありません。

②「一般の人」が(不定詞の)意味上の主語である場合や、意味上の主語が文脈から明らかな場合。

(ex) It is not easy to master English.

英語を習得するのは容易ではない

上の英文の不定詞(to master English)の意味上の主語は「一般の人[我々]」ですが、このような意味上の主語も、英文中に明示する[付ける]必要はありません。

(ex) My dream is to study abroad.

ボクの夢は留学することです

上の英文の不定詞(to study abroad)の意味上の主語は、文脈上「私」であることは明らかなので明示されて[付いて]いません。

③S+V+O+to do[願形]~ 構文。
C

SVOC構文は、OとCの間には主語と述語の意味関係が成立しています。Cがto不定詞だった場合も同様です。したがってその場合、(Cである)to不定詞の意味上の主語はOになります(for A という形で意味上の主語を表すことをしない)。

(ex) I advised him to keep the secret.

私は彼にその秘密を守るように忠告した

上記の英文の to keep the secret の意味上の主語は、Iではなく him です。このように、SVOCのOとCには、主語と述語の意味関係が成立します。

(2)意味上の主語を明示する必要がある場合。

それは文の主語と(不定詞の)意味上の主語が異なる場合です。

(ex) I worked hard in order for my family to live happily.

私は家族が幸せに暮らせるように一生懸命働いた

上の英文の場合、for my family と意味上の主語が付いていますが、その理由は、「幸せに暮らす(to live happily)」のは「家族(my family)」であり、文の主語の「私(I)」ではないからです。このような場合は「家族が幸せに暮らせるように」と、その意味上の主語を和訳でもきちんと明示して訳さなければいけません。もう1つだけ例をあげておきましょう。

(ex) The speaker spoke clearly enough for the audience to understand what he was saying.

講演者ははっきりとした口調で話したので、聴衆は彼の言っていることが理解できた

先程の「(形・副)+enough to do[原形]～」の構文ですが、意味上の主語が付いて、

(形・副)+enough for A to do[原形]～: ①とても(形・副)なのでAは～する
②Aが～するほど(形・副)

という形になっています。

レクチャー6

完了不定詞(to have+p.p.～)の用法。

私達は一般的に to do[原形]～ のことを不定詞と言っていますが、文法用語では、to do[原形]～ のことを「単純不定詞」と言います。そして to have+p.p.～ のことを「完了不定詞」と言います。

「単純不定詞(to do[原形]～)」は、主節の動詞の時制と同じかそれより未来の内容を表します。

④・「主節」とは(従位)接続詞・関係詞・疑問詞等が付いていない(裸の)S+Vのこと。
・p.p.とは「過去分詞」のこと。

(ex) John is said to be guilty.

ジョンは有罪だそうだ

上の英文の to be guilty は、主節の動詞(is[現在時制])と同じ時制、つまり現在の内容を表しています。

単純不定詞(to do[願]～)が主節の動詞よりもこれから先の(未来の)内容を表すこともあります。それは、「希望・期待」「意図」「決心」などの動詞の後に続く場合です。

(ex) I promise not to be late again.

私は二度と遅れないと約束します

上の英文の not to be late again は、主節の動詞(promise[現在時制]。「意図」を表す動詞)よりも後、つまりこれから先の(未来の)内容を表しています。

(ex) I expect him to succeed in future.

私は将来彼が成功することを期待している

上の英文の to succeed は、主節の動詞(expect[現在時制]。「期待」を表す動詞)よりも後、つまりこれから先の(未来の)内容を表しています。

確かに上の2つの英文の不定詞部分は、節を用いて書き直すと、未来を表す will を用いて表現することになります。

→ I promise that I will not be late again.

→ I expect that he will succeed in future.

このような「単純不定詞」に対して「完了不定詞(to have p.p.～)」は、主節の動詞より時制が1つ昔であることを表わします。

(ex) He seems to have been ill.

彼は病気だったようにみえる

上の英文の to have been は、主節の動詞(seems[現在時制])よりも1つ前の時制、つまり過去の内容を表しています。したがって節で書き直した場合、(不定詞部分は)以下のように過去時制で表されます。

→ It seems that he was ill.

もちろん主節が過去時制の場合、その後ろの完了不定詞(to have+p.p.～)は、それよ

り1つ昔、つまり大過去の内容を表すことになります。

(ex) The computer seemed to have been out of order.

上の英文の to have been は、主節の動詞が過去時制(seemed)なので、それよりも1つ前、つまり大過去の内容を表します(全体の訳は「そのコンピュータは壊れていたようだった」)。もちろん節で書き直した場合、(不定詞部分は)以下のように過去完了形で表されます。

→ It seemed that the computer had been out of order.

《 参考:完了不定詞(to have+p.p.~)のその他の意味 》

(1)完了不定詞が、「完了」の意味を表すこともある。

完了不定詞が「完了」の意味になるのは、その後「期間を示す語句(状態動詞の場合)」や「完了を示す語句(動作動詞の場合)」がついている場合です。

(ex) He seems to have been sick for a week.

彼はこの一週間病気がしい(今も病気が続いている)

上例の場合、for a weekという、期間を示す語句があるので、この完了不定詞は、「完了」を示していると見ることができます。したがって以下のように書き換えることができます。

→ It seems that he has been sick for a week.

(2)その他。

「意思」「希望」「予定」等を表す動詞(すべてこれらは「未来志向の動詞」)の過去形の後に「to have+p.p.~」が使われると、「その意思[希望・予定]が実現しなかった」ことを表します。

「予定」… was[were] to

「希望」「意思」…intended, meant, hoped, expected

(ex) I was to have left yesterday. ☞実際には出発しなかったことを暗示する。

昨日出発する予定だったので

I intended to have finished the homework. ☞実際にはやり終えなかったことを暗示する。

私は宿題をやり終えてしまうつもりだったのだが

この用法は形式ばった形で今はあまり用いられず、以下の用に主節の動詞を過去完了にする形の方がふつうになってきています。

→ I had intended to finish the homework.

レクチャー7

代不定詞の用法。

前述の動詞と同じ形の反復になるのを避けるために、to の後ろの部分が省略されることがあります。このような不定詞のことを「代不定詞」と言います。

(ex) You don't have to come here, if you don't want to (come here).

君はもしここに来たくなければこなくていいよ

上の英文の場合、文末の to の後ろには、come here が繰り返しを嫌って省略されています。

もう1つ例をあげてみましょう。

(ex) A: "Will you be going to Rome this summer after all?"

結局今年の夏、ローマに行くおつもりなんですか

B: "I'm still intending to."

ええまだそのつもりです

上の英文のBのセリフの末尾には、go to Rome this summer が繰り返しを嫌って省かれていますね。この to も代不定詞です。

ちなみに Will you be ~ing ? という表現は「～なさるんですか」という非常に丁寧な未来の内容を尋ねる言い方。

不定詞の否定。

(1)一般の不定詞の否定の表し方。

一般的に不定詞を否定する場合、必ず不定詞の直前に否定語(not, never など)を置きます。

(ex) He pretended **not to be** listening.
彼は聞いていないふりをした

(2)「目的」を表す不定詞の否定(つまり「～ないように」)の表し方。

不定詞が「～するために(は)」という「目的」を表す場合、

- ① to do[原形]～
- ② in order to do[原形]～
=so as to do[原形]～

どちらを用いてもいい。

しかし、同じ「目的」でも「～ないように」と言いたいときは、必ず

in order not to do[原形]～
=so as not to do[原形]～

を用いなければなりません。in order[so as]の部分を省くことはできません。

(ex) ○ I turned off the radio **in order[so as] not to** disturb her.
彼女の邪魔をしないようにラジオを切った

× I turned off the radio not to disturb her.

⊕ 「～するために(は)」という(肯定の場合)には、in order[so as] to do[原形]～でも to do[原形]～でもどちらでもいいから、注意が必要。

⊕ 例外は be careful, take care と(「目的」を表す不定詞が)共に使われた場合。その場合は「not to do[原形]～」を用いる。

(ex) Take care **not to** catch cold.

風邪をひかないように注意しなさい

I was especially careful **not to** mention the case.
その事件のことは言わないように特に注意した

レクチャー9

be to 構文。

(1) be to 構文の見極め法。

be to 構文とは、be to の部分全体を一種の助動詞と見なして考えるべき構文です。ただ、英文中で be to になるような構文には、

My dream is to be an actor.

私の夢は役者になることです

といった、単なるSVC構文もあります。そこで、それがbe to 構文なのか、単なるSVC構文なのかの見極めがまずできなければなりません。その見極め方は、be 動詞をはさんで前後がイコールで結べればSVC構文で、イコールで結べなければbe to 構文とみなします。

① My dream is to be an actor.

② You are to come here on time.

①の英文は、「My dream = to be an actor」と、be動詞をはさんで前後がイコールで結べますから「SVC」だとわかります。

②は「You ≠ to come here on time」と、今度はbe動詞をはさんで前後がイコールで結べませんからbe to構文だとわかるわけです(全体の訳は「君はここに時間通りにこなければならぬ」)。

(2) be to 構文の意味。

be to 構文は、前述のように、全体で一種の助動詞とみなします。たいていは助動詞の will, can, should[must] のどれかで言い換えることができます。具体的にその意味は、以下の5つです。

①予定 「～する予定になっている」

これは助動詞の will と同じで未来を表します。したがって未来を表す副詞(句)と共に用いられることが多いのが特徴です。

(ex) The concert is to begin at seven.

コンサートは7時に始まる予定になっています

この「予定」を表す be to を使った決まり文句に

be yet to do[原形]～ 「まだ～していない」

=remain to do[原形]～ ㊦ remain(留まる)に to不定詞(～するために)がついたと見るといい。

=have yet to do[原形]～ ㊦ have to(～しなければならない)に yet(まだ) がついたと見るといい。

という表現があり、受験では頻出。要チェックです。

(ex) The task is yet to be done.

その作業はまだ終わられていない

②運命 「～する運命になっていた」

これは主に過去時制で用います。never とセットで用いることも多いです。その場合(つまり never と共に用いられた場合)の訳し方は「決して～することはなかった」となります。ただ、「運命」というのは、「予定」の be to が過去時制で使われたただけのことで、そんなに仰々しく考える必要はありません。

(ex) Mr. Brown was never to see his home town again.

ブラウンさんは二度と故郷を見ることはなかった

③可能 「～できる」

これは助動詞の can と意味は同じです。主に否定文で使われることが多く、「be to be+p.p.～」という形になることも多いです。

(ex) The ring was not to be found.

その指輪は見つからなかった

④意図[思] 「～するつもりだ」

be to が「意図[思]」を表す場合の見極めはカンタンで、大半は if 節の中で用いられるというのがその特徴です。

(ex) If you are to succeed in anything, make a good start.

どんなことでも成功するつもりなら、良いスタートを切りなさい

⑤命令・義務 「～すべきだ」「～しなくてはならない」

これは助動詞の should, must と意味は同じです。実は be to 構文が一番多いのが「命令・義務」を表すものです。ですから英文中で be to 構文に出くわし、なおかつ意味を特定する目ぼしいヒントが見当たらない場合、まず「命令・義務」で訳してみるといいでしょう。

(ex) You are to pay your debt as soon as possible.

借金はできるだけ早く返さなければいけない

🔍 be to 構文の意味の覚え方のヒント。

「予定」の「よ」、「運命」の「う」…と頭文字をつないで「ようかいめ」。で「妖怪迷惑(ようかいめいやく)」と覚えよう。

《もう一歩深く! 「be to 構文」》

要するに S be to do[願]～ というのは「Sは(客観的・外的状況によって)～する方向へと進んでいる[向かっている]」ということを表している。to は「→」とイメージするといい。to の表す「ある方向」へ向かうのは、

- ① 「～しなければならない」
- ② 「～することになっている」
- ③ 「～するつもりがある」
- ④ 「～する運命にある」

から。またその結果として「～することが可能」になる。

一件 will や be going to と変わらないように見えるが、それらと異なるのは、

「自分以外の他者や外的状況、又は運命が予定[進む方向]を決めている」

点だ。

(ex) The prime minister is to visit the U.S. next month.

首相は来月アメリカを訪問する予定です

ここに首相の意思は感じられない。誰かスタッフが予定を決めたという

ニュアンスになる。個人が自分(の意思)で決めた予定は be to do[願]～は使わず、be going to do[願]～などを用いる。

つまり私用に関することなら

I am to go to Tokyo next Monday.

とか、

I am to marry her next month.

などとは言えない。

自分が決めたのではなく、運命または第三者によって決められたルールの上を走っている感じがするため。公式訪問などは、首相でなく周囲の者が決めた感覚があるので、この表現(be to 構文)は使える。

たとえばお母さんが子供に以下のような小言を言う場合。

”You are to do your homework before you play video game.”

この場合、主語は You(子供)だが、You(子供)の意思は入っていない。あるいは母親が勉強を(子供に)ごり押しするような言い方でもない。子供に対し、(客観的な事情に基づく)進むべき方向を指示しているのだ。You must do…との違いは、must を使うと親が有無をも言わず、宿題をするのを強制する感じになるが、You are to…では、たとえば

「確かウチのルールでは、あなたはTVゲームをやる前に宿題をするんだったわよね。」

といったような(言ってみれば「冷静さ」を感じさせる)ニュアンスになる。そんな「すでに決められたことに向かうことになっているよね」というニュアンスから「～すべきである[命令・義務]」という日本語訳が選ばれるのだが、must などを使った表現とは、そのニュアンスは微妙に異なる点に注意しよう。

If your company is to survive, the staff must be cut down.

上の英文、be to が if 節内で用いられている。文法的には「意図[思]」と分類されるもの。

実際、このようなセリフが発せられるシチュエーションというのは、おそらく傾いている会社の社長に対し、経営コンサルタントがするアドバイスといったところ。和訳としては、

「もしあなたの会社を「生き残り」という方向へ向かわせる(つもり)なら、人員を整理[削減]しなければなりません」

とでもなるのだろうが、実際には、ここでは社長や会社の意思は関係な

いことに注目して欲しい。結果としての和訳は「つもりである」になるが、中身を見てみると、全く相手の意見など聞いていない。単に、「～という方向に向かわせるなら」と言っているにすぎない。

Not a soul[人] is to be seen on the street.

これは、豪雨のためか、またはテロでも発生したのか、皆が屋内にいることを強いられているような様子が浮かぶ。あるやむを得ない理由のため、強いられて「人が路上にいるのを見られる方向には向かわないだろう[向かうことはないだろう]」と言っている。これが和訳になると「～できない」という意味になる。訳は本来の意味を表すための便宜上のもの。

まとめると be to 構文の特徴は、

- 「Sの意思は全く関係がない」
- 「あるやむを得ない理由やルールにより、SがVする方向に向かう」

ということ。そこから

「Sが～べきだ」

「Sが～できる[できない]」

「Sが～することになっている」

「Sが～するつもり」

という意味が出てくるのだ。

参考文献 「気ままに英語教育」 2008年2月17日より。

レクチャー10

不定詞を用いたその他の頻出構文。

(1) It is 形容詞 of A(人) to do[動]～. 「～するだなんてAは…だ」。

「It is～to do[動]…」の構文において、It is の後に「人の性質を表す形容詞」が入ると、直後の前置詞は of になるというルールがあります。

以下に例文をあげておきましょう。honest(正直な)、careless(不注意な)という形容詞がそれぞれポイントです。

(ex) It is honest of [×for] him to say such a thing in public.

人前でそんなことを言うなんて彼は正直な人だ

It was careless of [×for] you to leave your cellphone in the bus.

携帯をバスの中に置き忘れてくるなんて君は不注意だったね

Ⓢこの英文は、一見仮主語構文のように見えるが、実際にはそうではない。

Itは直前のA(人)の行為を指している(to do[原形]～以下は判断の根拠を表す副詞用法の不定詞句)。

この構文はA(人) is 形容詞 to do[原形]～. で言い換えることができる。

It is kind of you to tell me the way.

道を教えて下さってありがとう

→ You are kind to tell me the way.

Ⓢ更に形容詞がHowによって強調されて文頭に移動するとit isが省略されることも多い。

→ How kind (it is) of you to tell me the way!

(2) S have only to do[原形]～. 「Sは～しさえすれば良い」。

=All S have to do is (to) do[原形]～.

(ex) You have only to obey our order.

君は我々の命令に従いさえすればいい

=All you have to do is (to) obey our order.

ⓈAll S have to do is to do[原形]～. の場合、have toの直後の動詞がdoであれば、isの後のtoは省略してもいいというルールがある。上例はそのためにtoに()がしてあるのだ。

逆にdo以外の動詞がhave toの直後にきたときにはtoは省略できない。

これはAll S can do is (to) do[原形]～.(「レクチャー1」を参照せよ)

の場合も同じ。つまりcanの直後にdoがくる場合、toは省略できるが、それ以外の動詞の場合(toは)省略できない。

(3) have the 抽象名詞 to do[原形]～。「□にも～する」「～する□がある」。

(ex) I didn't have the courage[勇気] to say that.

私にはそれを言う勇気がなかった

He had the boldness[大胆さ] to demand that.

彼は厚かましくもそれを要求した

(4) 「動詞+to do[原形]～」の中で注意したい表現。

- ① used to do[原形]～
 - 1. 「(昔)よく～したものだ」 [過去の習慣] ≒would
 - 2. [used to beで]「(昔)～だった」 [過去の状態] =was[were]
- ② have to do[原形]～ 「～しなければならない」 =must
- ③ ought to do[原形]～ 「～すべきだ」 =should
- ④ come[get] to do[原形]～ 「～するようになる」 ☞ 自動詞+to do[原形]
- ⑤ happen[chance] to do[原形]～ 「たまたま～する」 ☞ 自動詞+to do[原形]
- ⑥ tend to do[原形]～ 「～しがちだ」「～する傾向にある」
- ⑦ fail to do[原形]～
 - 1. 「～しない」 =don't do[原形]～
 - 2. 「～できない」 =cannot do[原形]～

☞ never fail to do[原形]～で「必ず～する」となる。

- ⑧ seem[appear] to do[原形]～ 「～するように見える[思われる]」 ☞ 自動詞+to do[原形]
- ⑨ start[begin] to do[原形]～ 「～し始める」
- ⑩ learn to do[原形]～ 「～できるようになる」
- ⑪ manage to do[原形]～ 「(どうにか)～できる」
- ⑫ help (to) do[原形]～ 「～するのに役立つ」
- ⑬ continue to do[原形]～ 「～し続ける」 =continue doing～
- ⑭ cease to do[原形]～ 「～しなくなる」 =cease doing～

(5) 「be+形容詞[分詞]+to do[原形]～」の形で決まり文句的に使うもの。

- ① be anxious[eager/keen] to do[原形]～ 「～することを熱望している」
- ② be ready to do[原形]～ 「喜んで～する」「～する覚悟がある」
- ③ be willing to do[原形]～ 「～する意志がある、してもいい」
☞ willing は ready よりも消極的な意味が込められる。反意表現は
be unwilling[reluctant] to do[原形]～で「～したがるらない」。
- ④ be sure[bound/certain] to do[原形]～ 「必ず～するだろう」

- | | |
|--|---|
| ⑤ be free to do[原形]～ | 「自由に～できる」 |
| ⑥ be apt[prone/liable] to do[原形]～ | 「～しがちだ」 |
| ⑦ be likely to do[原形]～ | 「～する可能性がある」 |
| 會反意表現は be unlikely to do[原形]～で「～する可能性がない」。 | |
| ⑧ be going to do[原形]～ | 「～するつもりだ、～するだろう」 |
| ⑨ be supposed to do[原形]～ | 1. 「～すると思われている」
2. 「～することになっている」
3. 「～すべきだ」 |
| ⑩ be designed to do[原形]～ | 「～するように作られている」 |
| ⑪ be inclined to do[原形]～ | 1. 「～したい気がする」
2. 「～する傾向がある」 |